広島のきのこ雲の下で生きて

広島で被爆（9歳）
木内　恭子

あの日、ちょうど8時10分くらい前、空襲警報も警戒警報も解除になったので、兄と2人刑務所の大きな門を開けてもらって、「いってらっしゃい」と門番さんに言われ、学校へ行った。

私は9歳。父の仕事の都合で転勤、広島に来て2年目、小学校4年生だった。家族は8人、上の姉は茨城師範へ、下の姉は看護学生として広島療養所へ、そして兄は学徒動員で佐賀にいた。私は、父の刑務所勤務という仕事柄、疎開はせず、両親とすぐ上の小学6年の兄と、5歳の弟と一緒に広島にいた。

ピカッと光り、私は気絶

当時、中島小学校は2部授業になっていた。5年生以上は本校へ、4年生以下は地域に分散されて、寺小屋式の授業を受けていた。近くの「鶴の湯」と言うお風呂屋さんに着いて、授業が始まるまで、脱衣籠の中にランドセルを入れてから、6～7名の女の子たちと外の路地で石けりをしていた。男の子はみんなお風呂屋さんの中の広い浴場の中を、駆け回っていたと思う。そうしたら、ピカッと光った。そして私は気絶してしまった。どれくらい経ったか、気が付いた時は、辺りは真っ暗闇の状態で、どうしたんだろうと周りをじっと見ていたら、夜が明けるように、次第に白く明るくなってきた。周りの建物は全部潰れていて、私だけがその中でお座りをしている状態だった。友だちは一人もいない、何が起こったかわからなかった。しばらくすると、あっちからもこっちからも「アイゴー、アイゴー」という声がして、崩れた瓦礫の中から人が這い出してきた。近くには、朝鮮の人たちがたくさん住んでいた。みんな血まみれになって、服もちぎられた状態で、ムクムクと瓦礫の中から這い出してきた。何が起こったかわからない。けれども、血まみれで、ボロボロのかたまりが、広島飛行場の方に向かって歩いて行った。とにかくみんなの流れについて行かなければと思った。

「ゆっこ」と言って私の手を

私は頭に大きなこぶができたのと、右のくるぶしの外側が大きく腫れていたくらいで、血を流すような大きなケガはしていなかった。靴は脱げて無くなっていたが、とにかく自分で歩けることがわかったので、みんなの流れについて行こうと思った。そうしたとき、そのたくさんの人々の中から、私の全然知らない男の人が、「ゆっこ」と言って、私の手をつかんだ。誰だかわからないけれど、私の手を握ってくれたから、私のことを知っている人だなと思って、その人について行こうと決めた。実は、それが兄だった。兄は、中島小学校に通っていたが、あの日、住吉橋の先くらいまで行って、ピカッと光った瞬間火傷をした。それで、顔が倍ぐらいにふくらんでしまっていたので、すぐには兄とわからなかった。兄は半袖シャツ、半ズボンをはいていた。だから太腿から下、両肘から先、そして顔は全部火傷をしてしまった。熱いから川に飛び込んで、這い上がって人の流れにのった。そこでフラフラとみんなにくっついて 歩く私をみつけたのだった。そんな兄と手をつないで、刑務所まで帰ってきた。

刑務所の周りに人がどんどん流れてくる。血だらけで、すごい形相の人たちが、「助けてくれ、助けてくれ、中へ入れてくれ」「アイゴー、アイゴー」と言いながら。兄が門番さんに「開けてー」というと、私たち2人だけ中に入れてくれた。門番さんも、ピカッと光ったときに外にいて、兄と同じように火傷をしていたが、詰所のなかの火鉢の灰と、油を一緒に濡れば「火傷にいいから」と、兄に塗ってくれた。

私は母のことが気になった。母は官舎の中で、私たち2人を学校に送り出してから、医務課長さんの家へ、花の種をもらいに行っていた。「おはようございます」と玄関を開けた瞬間にピカッと光り、玄関のガラスの破片で血だらけになって倒れてしまった。その時弟は、母の足元にいたが、爆風で飛ばされ、家の奥の部屋の持ち上がった畳の下で、「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣いていた。 母は血だらけの状態で弟を抱え、道に出たところ、たどり着いた私たち2人と逢った。医務課長さんの家には、奥さんとおばあさまがいたが、おばあさまは、居間から官舎と官舎の間の路地に飛ばされていた。父は、役所の中で仕事をしていたが、ピカッと光ったとき、大きな机と本棚の間に足をはさまれて、大腿骨骨折で動けない状態だった。

あの日、広島刑務所の中には、１２６０人ぐらいの受刑者がいたが、脱走者も無く、火を出すことも無かった。その後、壊れた建物も、職員や収容者の力で、どんどん建て直され、病舎も建った。父も兄もそこに入り、家族は誰一人命を落とすことなく再会できた。兄は顔中ウミだらけで、髪の毛も全部抜けてしまい、しばらく高熱を出し続けていた。

被爆直後の広島では、毎日毎日刑務所の前の川に、何百